



向日葵 昭和43年

- ◆長い脚下
- 〔白種〕明治43年10月号より
- ◆川の流れ
- 〔詩〕大正10年1月号より
- ◆心のよろこび
- 〔草廬〕より 大正13年4月 新潮社刊

川の流れ

川の流れを
 見ているのはすきだ、
 いつまでも見ていたい、
 生きている、生きている、
 凄い程、生きている。
 お前達はうれしいうらさう。
 海へゆける。



考えすぎないで、身のまわりの自然の中で、見えるもの、聞こえること、なんでも素直に感じてみましょう。
 実篤は「言葉に羽が生えると詩になる」と言っています。
 のびのびして、心がよろこべば、あなたの言葉にも羽が生えて、詩になるかもしれせんよ。

心のよろこび

だまってほったらかしておく
 いつのまにか
 元気になってよろこんでいる
 俺の心の呑気さ。

この心のよろこび
 俺はどこかでいいことをしているのだから。
 この心のよろこび

心と云う奴は
 余程よろこびたがる動物なのだが
 人々はあまりに
 いろいろの重荷を
 負わせすぎるのではないかな。

誰の心でも
 無心になれば
 自づと
 よろこべるものではないのかな

(後略)

もっと知りたい

武者小路実篤

詩3

のびのび

武者小路実篤の詩には、無邪気な思いつきや、のんきな楽しい気分が書かれています。

そんな実篤の詩を読むと、私たちの心もゆったり明るくなります。深呼吸して、のびのびしましょう。

長い廊下

長い廊下を一人で

どしんどしんどしんと

大股で力を入れて歩いて見たい。

そうして時々、大声で怒鳴って見たい。

お——い

反響のない所で

力を入れて歩くのは、

損な気がする。

反響のない所で、どなって見るのも。

消えてゆくのが淋しい。

どしんどしんどしん

あたりにそれが響く。

お——い

あたりにそれが響く。

その内を一人で、小供らしく歩いて見たい。

(後略)



つわぶき 昭和44年



あなたも、誰もいない学校の廊下で、こんな思いをしたことはありませんか。「長い廊下」に書かれた気持ち、よく分かりますね。

この詩を書いた時、実篤は24歳。子供っぽい？ いいえ、大人だからとカッコつけずに、思ったままを書いているのです。

絵に書かれた言葉のように、人目ばかり気にしないで、マイペースでいきましよう。